柱島群島ライブラリー　3

# 宮本常一が見た柱島群島

岩国市教育委員会

柱島港（宮本常一　昭和 36 年撮影）

## 刊行にあたって

柱島群島は岩国市中心部より南東の沖にある有人島３島、無人島９島の計１２島で構成される島々です。瀬戸内海中にあるこれらの島々は岩国地域のほか愛媛や広島など様々な地域と交流しながら島の歴史や文化を育んできました。ただ、島という地勢的な状況により、記録として残らないところが多く、明らかになっている部分は断片的です。

近年、人口減少や高齢化が進んできており、島独自の歴史や暮らし、習慣などの記憶や営みが薄れてきています。本書は島の記録や記憶をとどめておくため作成した冊子です。この冊子が多くの方々の目に触れ、柱島群島の島々のことに思いをめぐらせていただければ幸いです。

## 目次


Ⅰ　宮本常一と柱島群島　1
Ⅱ　柱島　2
Ⅲ　端島　10
Ⅳ　黒島　15
付編　モノクーロムの柱島写真　19


# Ⅰ　宮本常一と柱島群島

周防大島町出身の民俗学者宮本常一（1907-81）は日本列島の隅から隅までを旅し、島、農村、漁村、山村、市井に暮らす人々の生活を見て、調査・研究して多くの著作を残している。そして、撮影した 10 万枚以上におよぶ写真もまた、当時の景観、生活などを知るうえでも重要な資料となっている。

宮本と柱島群島との関わりについて、日記等を見ると柱島群島の有人島である柱島、端島、黒島にも三度は訪れており、島での記録や写真を残し、著作のなかでも島の歴史、文化、暮らしのことにもふれている。また、柱島の庄屋であった中冨家の文書の書き写しなどもあり、黒島への移住や土地均分に関係する記述も見られるため貴重なものとなっている。

本冊子では、昭和 36（1961）年 8 月 26 日に宮本が柱島群島を訪問し、撮影した写真の一部を採りあげ当時の柱島、端島、黒島の状況をみていきたい。また、宮本ではないが昭和 45（1970）年頃に撮影された柱島の写真が柱島の自治会に残されているのでこれも一部を採りあげて紹介したい。

宮本常一（1907-81）

## Ⅱ　柱島

柱島群島のなかで宮本常一が多くの写真を残しているのが柱島である。群島のなかでも規模、人口の多い本島であることも要因となっているように思われる。宮本が撮影した内容は柱島そのもの、島から撮った周辺の島々、集落などの景観に関するもの、島独自の信仰に関するもの、生業や民具などくらしに関係するものなど多岐にわたっている。

宮本の昭和 36（1961）年の訪問では 8 月 24 日から 26 日までの 3 日間であり、日記には以下のように書かれている。

8. 24。朝 7 時半のバスでたつ。そして岩国市役所にいく。企画課にいって柱島についてのはなしをいろいろきく。それより新湊へいって伊保田行の船にのる。柱島へ 1 時間半でいく。船着場へ松重支所長来ていてくれる。宿に案内せられてその夜は島の現状をききつつのむ。ここも近頃海水浴客が大分ふえて来たという。

8. 25。金。はれ。朝、支所へいって振興関係の資料を見せてもらい、宿へもってかえってうつす。島の役員たち、次々に来てはなしていく。ここの人皆政治性がつよい。午后の船で千晴来る。千晴はここを調査して卒論をかこうというわけ。夜、支所長とはなす。

8. 26。土。はれ。朝、支所へいってしばらく千晴に必要な資料について見せてもらい、学校へいって見ると木本先生居ない。それより島内をみてあるく。宿へかえって昼食をすまし、船をたのんで端島、黒島にわたる。

（毎日新聞社編『宮本常一写真・日記集成』上巻）



日記によると島の現状も含めて資料の閲覧や収集を行っているようで、宮本の離島振興に関する想いも伺い知ることが出来る柱島での行動でもある。また、宮本の子息千晴もあとから柱島に来島しており、卒論で柱島を採りあげる千晴の調査も気になっていたのではないかと思われる。

### 現在の柱島

柱島港

松田港と小柱島

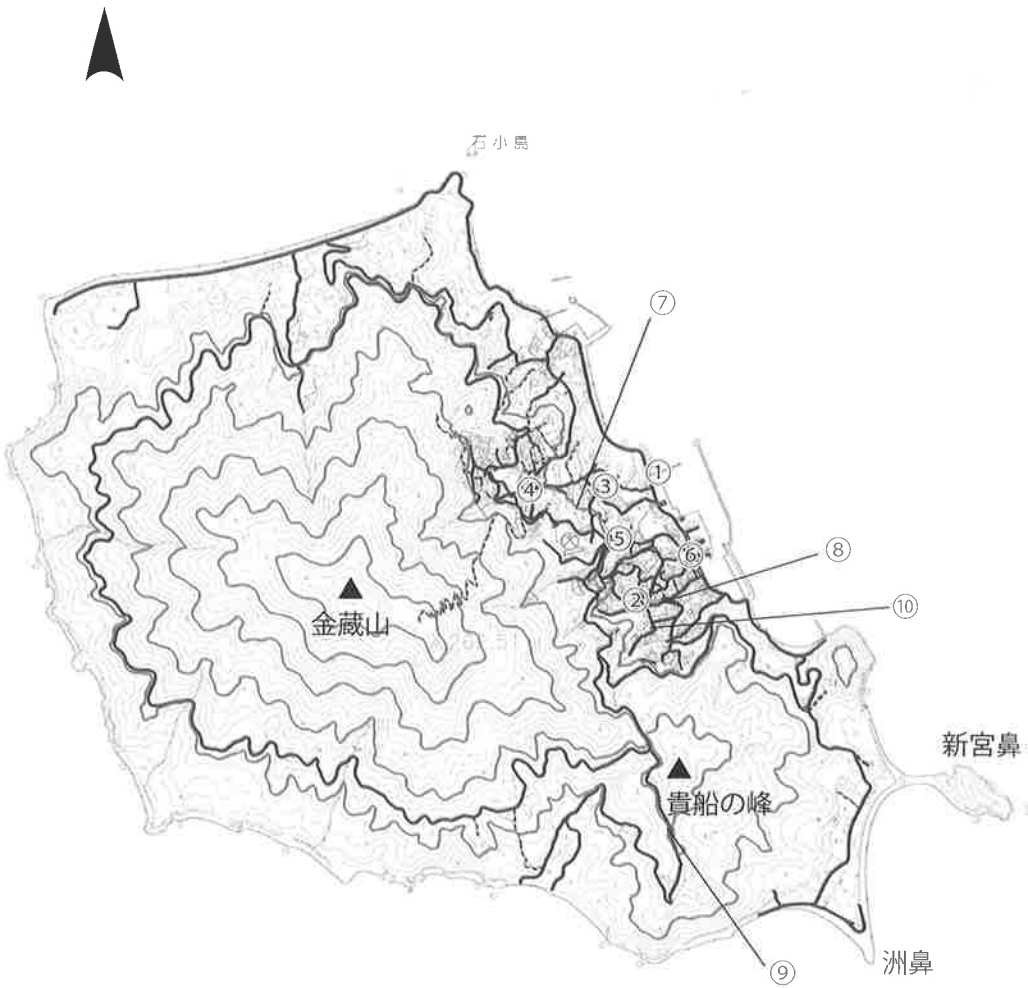
大師堂

島の行事、観音講の準備

柱島港でのヒジキ干し

金蔵山からみた島々

## 柱島（1/20000）




0　1:20000　1km

①柱島港の風景。撮影当時の港はコンクリートではなく切石を敷き詰めている。小船から荷揚げして人の手によって背負子で運んでいる。背負子は今でも使われていることがある。

②島にある共同の井戸。島内には共同で使用するものと個々の家で使うもの、そして田畠に利用するために掘られた井戸が各所で確認出来る。

③柱島港あたりから北側の集落を撮影した写真。田畠も耕作されている所も多く、建物も現在より多く確認出来る。

④島の北側の集落、牧地区あたりから倉橋島方向を撮影した写真である。柱島群島は周囲に倉橋島や忽那諸島、屋代島（周防大島）とその属島など安芸灘、伊予灘にある島々に囲まれている。

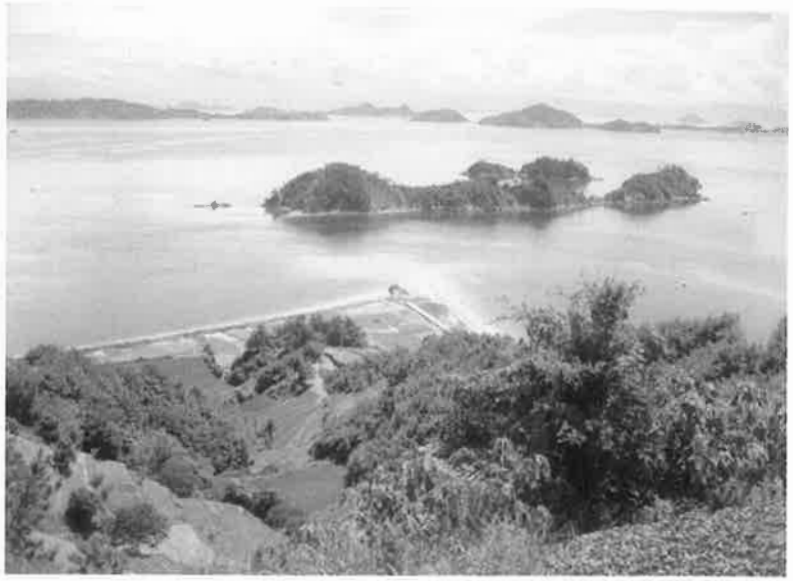
⑤若宮様とよばれる信仰の対象。宮本は『私の日本地図　4』のなかで「おまつりをしないとたたりにあう」と記述している。島内の田畠の傍らあるいは屋敷内に祀られている。

⑥柱島港より島々を見た写真。左奥は倉橋島、中央手前から右側に向かっては横島や鹿島などの島々が見える。また、倉橋島周辺の海域は漁場でもあった。

⑦集落の様子。道や屋敷や田畠の区画には多数の石が使われている。現在でも切石を積み上げた石積みが多く残っている。宮本が訪れた当時はまだ茅葺き屋根が倉庫などに残っている。

⑧中央の建物は西栄寺。『私の日本地図　4』では歓喜寺と誤記されている。西栄寺は庄屋中冨家の墓や幕末に奇兵隊総督として活躍した赤禰武人などの墓がある。





⑨貴船の峰から麓の砂洲、洲鼻、続島を撮った写真。奥の島々は屋代島（周防大島）、情島が右側、左側は二神島や津和地島など忽那諸島が見える。

⑩道端に置かれた背負子（おいこ・しょいこ）。現在でも使用する人が島でも見受けられる民具である。茅か藁などの草をのせて運んでいた途中であろう。

## Ⅲ　端島

端島は昭和 36（1961）年の訪問時には柱島から船を頼んで向かっている。この頃の端島はイリコ漁が衰退してカマドの火が消えてきた時期にあたり、宮本は日記の中でも、「端島はまったくゆきつまってしまっている。何とかしてあげねばならぬ。」と記しており、訪問で端島の現状を肌で感じていたようである。

端島での写真は島の東側の集落と西側の浜にあったイリコ小屋やカマドの様子を撮影しており、漁業に関する写真が主となっている。宮本の訪問以前は、群島の中でも漁業の盛んな島であり、漁獲高は柱島や黒島より上であった。この名残をとどめておくために宮本は撮影をしたのではないかと伺えるのである。

### 現在の端島

かつてイリコ小屋があった浜

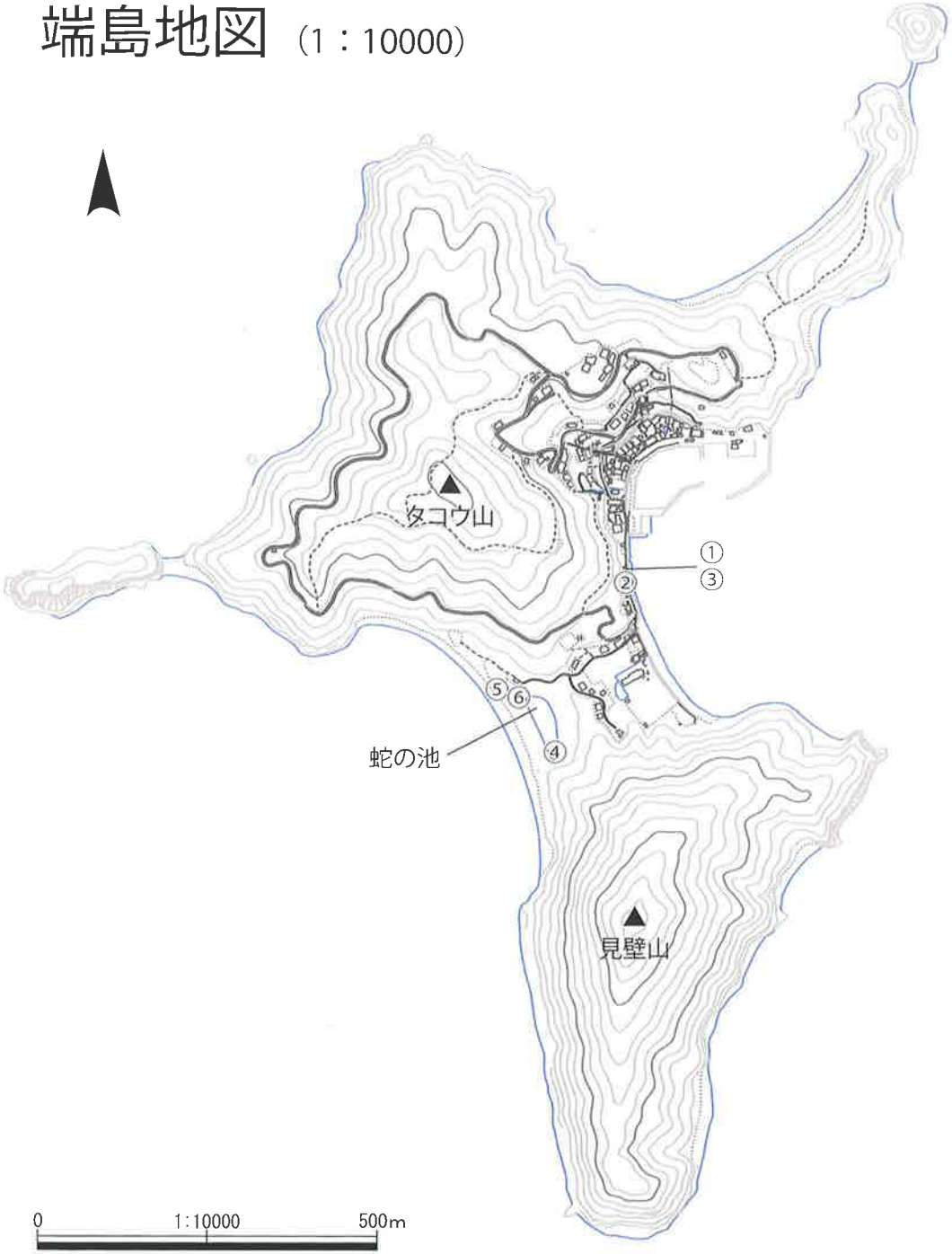
端島港

端島から見た柱島

端島のタコ壺



## 端島地図（1：10000）



①端島港の湾内の風景。イリコ漁の衰退はあるが、近海での漁へと転換しながら生業を維持している。奥の島は柱島である。

②島の東側、集落と浜。当時は４つの網元が存在し、漁業の盛んな島であった。奥の鳥居は端島神社のもので宮本が訪問した年に建てられたものである。

③端島神社の手前に現在もある共同の井戸。

④島の西側の蛇の池。平郡島の蛇の池とつながっているという言い伝えものある。現在は雑木で覆われている。また、島の山の部分まで当時は開墾されていたことがわかる。

⑤西側の浜、今は残っていないがイリコ小屋とイワシを煮るカマドがあった。捕ったイワシを網船から小船に載せ替えて浜に水揚げをした。

⑥イワシを煮るカマド。ここで煮たイワシを干してイリコをつくっていた。



# Ⅳ 黒島

黒島は昭和 36（1961）年の訪問時には柱島から船を頼んで端島に立ち寄った後、黒島に向かっている。この時の日記のなかでは黒島は向かったとの記載のみで感想や調査のことは書かれていない。しかし、黒島は宮本が瀬戸内海の島々を考えるなかでも重要な位置づけがなされている。それは、「土地均分」と「共同所有」の概念である。「土地均分」は島の土地を平等に区画も明確にして分けることであり、「共同所有」は島の生業の中心となる漁具を島民で共同の所有とすることである。黒島ではイワシ網とタコ壺が「共同所有」の対象となっている。宮本はこの部分を意識して撮影を行ったと考えられる。

## 現在の黒島

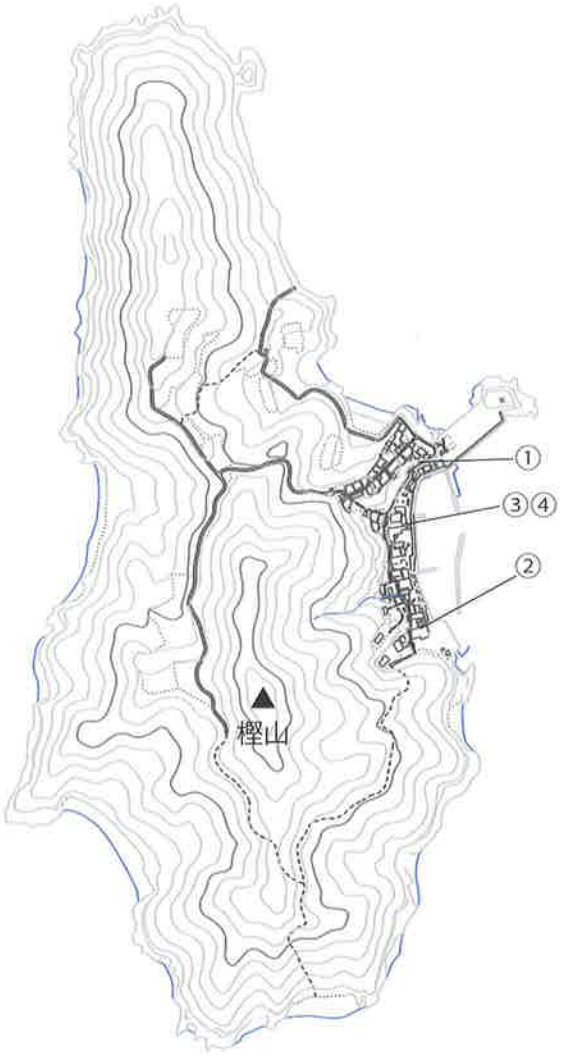
黒島港

黒島のタコ壺

大師堂

イワシ小屋

# 黒島地図 (1：10000)




0　1:10000　500m

①黒島の北側にある集落。奥は山の上まで畑が拡がっている。

②島の南側。黒島小学校やイワシ小屋、黒島神社、大師堂などが見える。

③イワシ網の船、2 艘 1 組で漁を行う。この時期には網（元）は二つになっていた。

④浜での様子。船底を燻している所。



# （付） モノクロームの柱島写真

昭和 45 年頃に撮影された柱島の白黒写真である。宮本常一が撮影した写真とは被写体が異なるものも多い一群であるが、柱島でかつて行われていた真珠養殖や行商などの暮らしにかかわるものが多く、当時の柱島の様子を知る資料写真であるためここでいくつかの写真を紹介したい。

行商の様子である。風呂敷を担いで家々を売り歩いたり、港に船をつけて船上で販売したりする。食料品や生活雑貨、衣料品などが呉や今治など山口県以外のところからも販売に来ていた。今治の行商人は着物を売りに来ていた。また、島内の浜や集落内に砥部焼の破片が見られたり、賀茂神社に供えられる御神酒が呉の酒だったりと、今よりも愛媛や広島との交流が密であったことがわかる。

幕末、奇兵隊の総督にもなって活躍した志士赤禰武人の生家、元々は蒲刈島の医者松崎家の出身で柱島で生誕し、その後、島の庄屋中冨家の養子になり、さらに阿月（柳井）の領主浦氏の家臣、赤禰忠左衛門の養子なって赤禰姓を名乗る。現在は生家の建物は残っていない。

農作業の様子。今は作っていないが以前は米も作っていたことがわかる。牛も農耕用に使われていたようである。豆は横槌で叩いて殻と豆を分けていた。

島で以前行われていた真珠の養殖。写真は真珠をとるために養殖したアコヤ貝を開き生成した真珠を採っているところである。

盆踊りの光景で、戦没者への供養も含めて僧侶の読経で始まる。

※19・20 頁写真は柱島自治会提供



## 参考文献


斎藤　潤「山口県端島・黒島」『しま』244（日本離島センター　2016）

奈良本辰也　三坂圭治編『山口県の地名』（平凡社　1980）

藤田慎一「宮本常一写真を読む　その７　柱島群島（山口県岩国市）前篇」『しま』248（日本離島センター　2017）

藤田慎一「宮本常一写真を読む　その８　柱島群島（山口県岩国市）後篇」『しま』249（日本離島センター　2017）

毎日新聞社編　『宮本常一　写真・日記集成』上・下　（2005）

宮本常一『瀬戸内海の研究』（未來社　1965）

宮本常一『私の日本地図　４　瀬戸内海Ⅰ　広島湾付近』（未來社　1970　2014 再版）



1　本書は地域資源活性化事業で作成した冊子『柱島群島ライブラリー３　宮本常一が見た柱島群島』である。

2　本書の作成にあたっては柱島、端島、黒島の住民の方々をはじめ、以下の方々からのご教示、ご協力を得た、記して感謝したい。
（敬称略　五十音順）
周防大島文化交流センター（宮本記念館）、高木泰伸

3　宮本常一撮影の写真についてはすべて周防大島文化交流センター（宮本記念館）の所蔵である。

柱島群島ライブラリー　３

宮本常一が見た柱島群島

平成 29 年 3 月 31 日発行

執筆・編集　藤田慎一（文化財保護課）

発行　山口県岩国市横山二丁目７－１９
岩国市教育委員会文化財保護課

印刷　大村印刷株式会社